

交叉した人生（志村君とのこと）

同じ年の友人・同級生という以上に、志村君と私の間には不思議な関係があった。それを適切に表現することは難しいのであるが、あえて一言で言えば、彼と私は、何回かその生き方が入れ替わっているのである。

初めて彼と会ったのは、昭和 48 年、当時の東京大学農学部水産学科の第二講座である。卒論で研究室に入った 4 年生と研究生という関係であった。すぐに親しくなった。当時、オダムの「生態学」はまだ日本語に翻訳されていなかった。大学院生を主体とするオダムの「生態学」の輪読会があり、彼に誘われるままにそのメンバーとなった。メンバーは、すでに学位を所得されていた方から最年少の我々まで、幅広い年齢層で構成されていて、メンバーの専門分野も、水産資源学、環境学、魚病学、海洋学、プランクトン学、増養殖学と幅広かった。今思い出せるメンバーは、渡辺精一（現東京水産大学教授）、早川康博（現水産大学校教授）、西田周平（現東京大学海洋研究所教授）、水野恵介（現海洋科学技術センター海洋観測部）などである。その中であって、彼はもうすでに水生生物や水産、生態学について広い知識を持っていた。私の方はなんとなく水産学科に進学し、やることもないから卒論研究をしているという感じであったので、彼の知識に驚いた。当時すでに生態学や環境学に強い興味を持っていたのだと思う。その年の秋、私は研究室からアルバイトの仕事を頼まれた。静岡県浜名湖にある東京大学農学部附属水産実験所に行ってクルマエビの硫化水素耐性を調べるという仕事であった。仕事は順調に進んだが、本来の卒業研究のテーマではなかったため、卒論の仕事が忙しくなると、手の空いていた志村君がその仕事を引き継いだ。これが彼との最初の共同作業である。そのような経過の中で、大きな変化がおきた。第二講座の助教授であった平野礼次郎先生が水産海洋学講座の教授に転任されたのである。私は平野先生を指導教官としていたので、平野先生が教授となった水産海洋学研究室に移り、志村君は第二講座に残った。第二講座は魚病学中心の研究室となり、志村君は寄生虫学の研究を専門とすることになる。一方、海洋学研究室は水族環境学の研究室となった。すでに、述べたように志村君は、生態学や環境学に強い興味を持っていた。わたくしはいい加減な学生だったので、実のところどんな研究テーマでもかまわないと思っていた。この時、お互いの希望とは別に、流れのままに、お互いの生き方が入れ替わってしまった。

似たようなことがもう一度起きた。志村君は魚類寄生虫の研究でとても立派な学位論文を書き学位を習得した。同じ年に私も学位を取得したが、家庭を持って子供も抱えていた私は、収入さえ得られればどんな仕事にでもありつきたいと思っていた。そんな時に、システム科学コンサルタンツ株式会社（以下 SSC）の富山保さんから、アルバイトで仕事を手伝われないかと声をかけられた。研究室では水産庁から委託した仕事が続いており、その仕事を担当していた私は、研究室からすぐには抜けられない事情があった。当時の SSC はまだアパートの一室からやっとな賃ビルに事務所を移したところで、小数の社員で開発コ

ンサルティングをやっていた。大きな企業をバックにしていない独立した民間の開発コンサルティング会社というのはまだ少なかったと思う。家庭的な雰囲気が無理が利いた。私は志村君に声をかけた。彼も研究生として研究室に残り、研究者としての就職先を探していた。そこで、二人でひとつの仕事をすることにした。彼が研究で忙しい時は私が SSC でアルバイトをする。私が研究に専念しなければならないときは彼が SSC で働くというもので、ジョブシェアリングである。コンサルティングのように担当者の個性とその継続性が必要な仕事では、仕事を分け合うのは難しいと思うが、このシステムは機能した。彼以外の人がパートナーであったらそんなにうまくはいかなかったと思う。私は、開発コンサルティングという仕事も悪くないと思った。そこで、SSC の社員となって、その身分で SEFDEC（東南アジア水産開発研究センター）の専門家として派遣されるという話に乗ってその準備を進めた。おそらく志村君はその後、どこかの機関の研究職に就くのだろうと思っていた。その矢先に、東京大学農学部附属水産実験所の助手にならないかと声をかけられ、私は SEFDEC を断って水産実験所の職員となった。そして、志村君は SSC の社員となって、本格的に開発関係の仕事をするようになり、やがて JICA の仕事につく。このときも、彼が私に予定されていた生き方を生き、私が彼の生き方を選択したような不思議な気持ちがあった。

その後は、頻繁に行き来するわけではなかったが、たまに会ったときには、特別な友情を感じた。そして、三度、二人で仕事を分け合うことになった。彼は水産開発援助の専門家として、東京大学農学部の新設された国際開発農学専修の非常勤講師となり、水産開発や援助について学生を指導することになった。そしてまったく偶然のことであるが、大学を転々とした跡に、私は東京大学大学院農学生命科学研究科・農学国際専攻の教授となり、彼と同じ授業を担当することになったのである。農学国際専攻の教授となったのは、たまたま、1年ほど SSC で働いていたということも関係しているのだろうが、評価するほどの経験でもない。やはり偶然というべきだろう。私が水産増養殖の技術面を教えて、彼が実際の開発協力を教えるという役割分担だった。そしてお互い、また仕事を分け合うことになったということが、ひどくうれしかった。できれば二人で協力して、水産開発協力に関する教育に新しい考え方ややり方を導入したいと思っていた。

このまま定年まで働いて退職したら、小さな民間アパートを借りて開発コンサルタント会社をやりたいとぼんやりと思っていた。もちろん、そのときは志村君がパートナーである。志村君が海外出張中は私が電話番と営業をやる。私が海外出張中は彼が電話番と営業をやる。若いときにやったシステムと同じである。爺さん二人がところどころ的外れな開発プランニングをやるというのも人間的で楽しいかもしれない。いや、楽しいに違いないと思っていた。

そしてこの妄想は、今回の志村君の死によって、まさに妄想のままに終わるのである。

私にはそれなりに帰結のあったはずの物語が、突然に終わってしまったように感じられるのであるが、はたして、今彼はどう思っているのでしょうか。

(本稿は JICA 専門員便り「志村専門員特集号」に寄稿した故志村茂氏への追悼の一部を書き変えたものである。20050224)